

地域子育て支援拠点研修事業<四国開催> 中堅支援者向け研修

【開催趣旨】

平成 19 年度より、つどいの広場事業、地域子育て支援センター事業を統合し、児童館などのスペースも活用しながら、地域子育て支援拠点事業(ひろば型、センター型、児童館型)が新たに再編されました。

拠点に関わる実践者の方々の研修についても、開設初期の課題とは異なる中堅支援者向けの内容が求められる段階にあります。

そこで、これまで地域子育て支援の実践者として経験を積んでこられた方々や、地域子育て支援拠点の施設長、責任者を対象に、基礎的な知識を踏まえた上での専門研修を実施します。

拠点スタッフ一人ひとりがこれまでの活動を振り返り、専門的な見識を深め、より高いスキルを身に付けるとともに、平成 21 年度の(財)こども未来財団の調査研究事業で作成された『地域子育て支援拠点事業における活動の指標「ガイドライン」』についても周知することを目的とします。

【プログラム趣旨】

平成 14 年度から始まった「つどいの広場事業」が、平成 19 年度より、つどいの広場事業、地域子育て支援センター事業を統合し、児童館などのスペースも活用しながら、「地域子育て支援拠点事業」(ひろば型、センター型、児童館型)として再編され、実施拠点数も増えつつあります。

今年度は、主に子育て支援拠点の事業実施を検討している関係者(行政関係者・実践者)および子育て支援拠点での3年以上の経験を有する方々を対象に、地域子育て支援拠点事業の意義・役割を共有し、地域子育て支援拠点事業のガイドラインについても学ぶ機会として研修事業を実施することを目的とします。

- 開催日 2010年9月18日(土) 10:00~16:30
- 会場 香川大学幸町キャンパス北館(教育学部棟)(〒760-0016 香川県高松市幸町1番1号)
- 主催 財団法人こども未来財団・NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会
- 後援 厚生労働省・(社福)全国社会福祉協議会・香川県・高松市・香川大学教育学部
- 協力 NPO 法人わははネット
- 参加者数 参加者合計 152名 (男性 10名 女性 142名)
(行政 49名、NPO 任意団体 79名、他団体・企業 7名、その他 17名)

<開会あいさつ>



開会挨拶
NPO 法人わははネット
理事長 中橋 恵美子さん



主催者挨拶
財団法人こども未来財団
研修事業部 次長
岡林一枝さん

●プログラム1 基調報告 ● 『地域子育て支援拠点事業の概要と展望』

厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課 少子化対策企画室 室長 黒田 秀郎さん

はじめに、地域子育て支援拠点事業の役割と拠点事業に期待されていることについてお話がありました。この事業の背景となる子育て家庭に対する支援に加えて、平成 21 年に第 2 種社会福祉事業として児童福祉法の中に位置付けられたことで、さまざまな相談に対して各種関係機関との連携・協働が今まで以上に期待されています。スタッフにも子育て支援の専門性の向上が求められますが、それによって「敷居が高くなる」ことのないよう当事者性を生かした活動の工夫が必要とのことでした。



黒田 秀郎さん

次にひろば事業にこれから期待したいこととして、これまでのひろば事業の中心であった交流・相談に加えて、多様な子育て支援活動や関係機関とのネットワーク化を図るひろば型「機能拡充」や常設のひろば開設が困難な場合の「出張ひろば」の活用についてのお話がありました。

最後にこれからの子育てを巡る最近の動きとして、平成 22 年 1 月に閣議決定された「子ども・子育て新システム」から幼保一元化、政府の推進体制、財源の一本化、さまざまな保育サービスについて資料を交えながら説明がありました。新しいシステムに対する子育て家庭からの相談に柔軟に対応していくことも、これからのひろばには期待されているとのことでした。

●プログラム2 基調講演 ● 『地域子育て支援拠点事業における活動の指標「ガイドライン」について』

【講師】 日本福祉大学 教授 渡辺 顕一郎さん



渡辺 顕一郎さん

地域子育て拠点事業が多様な実践を行う中で、利用者主体の視点に立って、支援の質の標準化を目指すために作成された「ガイドライン」に沿ってお話が進みました。この「ガイドライン」は、実践の核となるものとしてこれから活用されていくもので、今回、主任研究者である渡辺先生のお話を直に聞くことができ、これからの実践のための大切な学びの場となりました。

まず、支援者の役割として、子育て家庭同志や地域とをつなぐ「架け橋」となっていくこと、虐待などの「予防的支援」を担っていること、第 2 種社会福祉事業としての責任性などが挙げられました。地域との関わりが薄れ、常に緊張した状態で子育てをしている親は、まず支援者に受容されることが重要で、親同士の支え合い(ピア・サポート)で不安や喜びを共有することが大切であるとのことでした。また親だけでなく子どもにとっても受容され安心して過ごして自発性が芽生える場所として機能するようなかかわりを利用者自身も望んでいるということが資料からも分かりました。

最後にガイドラインに基づく自己評価表の活用について触れ、主観的・客観的に評価することで課題を共有し、自団体の活動評価と支援の質の向上につなげていくことについてお話があり、チームワークを大切に、広い視野を持って活動することの大切さを感じました。

●プログラム3 分科会●

<第1分科会> 「事例に学び実践に活かす、ちょっと気になる子への支援」

【講師】 松井 剛太さん(香川大学教育学部 准教授)

【コーディネーター】 中橋 恵美子さん(NPO 法人わははネット 理事長)

●事例報告 1 虐待の恐れのある家庭をつなぐ

宮脇 一正さん(高松市こども未来課こども女性相談室 室長)

●事例報告 2 発達の遅れが気になる家庭への連携支援

中井 香さん(香川こだま学園 臨床心理士発達障害窓口)

●事例報告 3 親自身が問題を抱えた家庭への支援

山本 桂子さん(にしおか医院地域子育て支援センター 臨床心理士)

【オブザーバー】 山下 祐司さん(香川県健康福祉部子育て支援課 課長)

子育て支援が多様化していく中で、ちょっと気になる家庭に対して必要となるちょっとした配慮について事例を交えて学びました。



松井 剛太さん



杉原 博美さん 宮脇 一正さん

事例1 高松市こども未来課子ども女性相談室より児童虐待について事例報告がありました。平成17年4月より新設されたこの課では複雑化多岐化した現在の家庭事情に対応するため早期発見早期対応に努めています。その中から1つの家庭について家庭訪問から少しずつ職員に心を開いてゆく様子を報告いただきました。

事例2 西岡医院地域子育て支援センターよりちょっと気になる親子について報告がありました。最初の相談から少しずつ信頼関係を築いて、他機関や人とのつながりを活用したきめ細やかな支援の大切を感じられる報告でした。

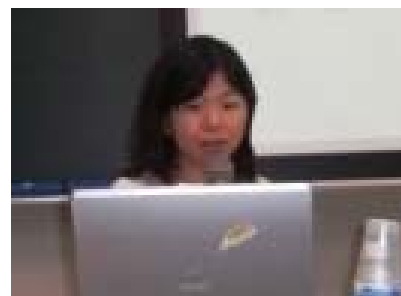


山本 桂子さん



事例 3 香川こだま学園より地域との連携を強化しながらのちょっと気になる家庭への支援について報告がありました。

後半はパネリストによるクロストークや参加者を8つのグループに分けたワークショップによって、地域や他機関との連携について話し合いました。各グループから出た連携のポイントは多くが子育て支援拠点からの行政や他機関への働きかけの大切さや拠点職員が自らの足でネットワークを広げる事の大切さを指摘。ボトムアップでシステムを作っていくこと、スペシャリストではなくジェネラリストが求められていることなど、これからの連携作りのポイントが話されました。



中井 香さん



山下 祐司さん

<第2分科会> 「聞く・話す・自分を知る」

カウンセリングの技法に基づき、利用者の話を聞く、利用者話すというスキルを学ぶとともに支援者としての自分自身への気づきを深める。

【講師】 佐々木 政人さん(愛知淑徳大学 教授)

【コーディネーター】 草薙 めぐみさん(NPO 法人子育てネットくすくす 理事長)



佐々木 政人さん



草薙 めぐみさん

第2分科会は、佐々木政人先生の指導のもとカウンセリングの技法に基づき、利用者の話を聞く・利用者話すというスキルを学ぶとともに支援者としての自分自身への気づきを深めるワークショップを行いました。

前半は3~4人のグループに分かれ【利用者の話に耳を傾ける技術】【話し合いのオープンな誘い方】【感情の反射(気づき)】などマイクロカウンセリングの基本技術を学びました。学んだ技術を活用して順番に『話し役』『聞き役』『観察者』を体験し共感する心・その場の様子・雰囲気を感じました。

後半は6~7人ずつの6グループに分かれ、それぞれのグループのうち対象者一人の人生絵本を作るというワークショップを行いました。限られた時間の中でマイクロカウンセリングの技法に留意し、対象者の話を引き出していき、人生絵本をグループで完成させていきます。



最後のまとめに草薙さんより、「センター型であれ、ひろば型であれ、児童館型であれ、利用者さんは勇気を出してその扉を開いて来たのだということを忘れないで、対応してほしい」との言葉がありました。支援者に求められる『親と子どもの最大の理解者、話し相手』であるための傾聴する態度を磨く場となりました。



<第3分科会> 「発達の気になる子どもやその周辺へのアプローチ」

【講師】 渡辺 顕一郎さん(日本福祉大学 教授)
【コーディネーター】 野町 文枝さん((社福)未知の会 花ノ宮保育園 園長)



渡辺 顕一郎さん



野町 文枝さん

第3分科会では、障害の有無にかかわらず、一人の子どもとしての成長を見守ることが支援の基本であるという認識に立ち返り、その具体例や方法についてワークショップを交えてお話いただきました。

前半は渡辺顕一郎さんから、障害の範囲や分類・発達障害についての基本的な概要とその世界観についての説明がありました。特に乳幼児期の発達支援は子どもが安心して、楽しく過ごせることが障害の有無に関わらず原則であることや、支援者がその個性を尊重し温かく受容することで、子どもとの信頼関係をしっかりと育むことが重要であるそうです。

ここからは実際にひろばに発達障害の子どもが来たら、どのようにひろばの中で遊びを展開していくかをワークショップ形式で進めていきました。その後グループごとに具体的に発表していきました。野町文枝さんからは手遊び歌の提案がありました。

後半は障害児の親・家族への支援についての基本的な考え方や親の心理・関わり方についてお話いただきました。子どもの障害を受容する過程で「子どもの障害を認めたくない、辛くて苦しい。死にたい。」と打ち明けてきた親にどう接していくのか、をワークショップ形式でグループごとに話し合い、発表しました。その中で「傾聴」「共感」のキーワードが出てきました。親の気持ちに寄り添い、辛い思いを抱えた中で来てくれたことに対して敬意を払い、子ども自身の成長を一緒に見守っていきながら、必要に応じて地域との連携を図っていくことが、親の支えとなっていくそうです。



野町さんからは、3歳未満の子どもがいる家庭の75%を占める在宅乳幼児への母子支援は、親や家庭が子育ての方法を学ぶことで親子とも自信を持つようなカリキュラムが必要であり、そのためには立場や利害を超えて根本的に向かい合っていかななくてはならないことを最後にお話いただきました。